

張筵

〔延喜式主計二十四〕凡中男一人輸作物略○中防壁一枚長四丈、廣七尺、

〔松の落葉三〕むしろ

むしろはくさぐさあり略○中又張筵といふあり、これはとにはりて塵のたち來るをふせぐもの

なり、西宮記四の卷相撲のくだりに、三府佐著林子給張筵云々、有飛塵者主殿灑水掃除撤張筵とあり、

〔延喜式掃部三十八〕雜給料

張席一具長二丈、廣七尺二寸、料長席二枚、曝布一端、生絲六兩一分二銖、麻一斤九兩繩料十三兩、縫官人單

六人、

〔江家次第七月〕相撲召合裝束

從南廂東第一間半、至于西端、立張筵有緒四處、闌東西端階、東西妻下也、

〔貞丈雜記家作十四〕一かけむしろと云ふ事、舊記にあり、三好亭へ御成記、又東山殿是れ疊の表にへり、年中行事に有り、○中略を付けて、暖簾の如く下ぐるなり、

〔類聚名物考調度五〕かけむしろ 懸筵

今も禁裏仙洞ともに用らる、也、紅端の疊の表を二帖をよせ合せて、長き御廊などにかけるるもの也、京都將軍の時代に用られしは、常の一枚を又中半よりきりたると見ゆ、今はさにはあらず、

〔家屋雜考カケムシロ〕掛筵 こは疊表へ縁をつけて、帳の如く垂れたるなり、長祿二年以來申次記に、室町御

所の事を注して、掛筵と申すは、上の御末と、中の御末との間に、高敷居有之、其上より掛けられ候なり、筵は二枚にて候へども、一枚を中を分けて、縁を常のごとくさし候へば、小敷四枚になり候なり、一間の所にかけて申すなりなどみえたる是なり、

懸筵